

鏡地獄

江戸川乱歩「鏡地獄」戦後改稿版

落合 教幸

〈解題〉

「鏡地獄」は大正十五年十月に『大衆文藝』に掲載された短篇である。

大正十四年に専業作家となった乱歩は、大正十五年の一月、大阪から東京へと転居する。この大正十四年から昭和二年三月までの期間を乱歩は自らの作家としての最良の期間だったとしている。乱歩の代表的な短篇小説の多くがこの時期に書かれている。大正十五年に発表の十一編の短篇のうち、乱歩が「やや取るに足るもの」として挙げているのが「踊る一寸法師」「お勢登場」「鏡地獄」の三篇である。「踊る一寸法師」は『新青年』に掲載され、「お勢登場」「鏡地獄」は『大衆文藝』に掲載された。

『大衆文藝』を刊行していた「二十一日会」というのは、

白井喬二、長谷川伸などが結成した会で、従来の通俗小説とも純文学とも異なる新しい文学を目指した。『大衆文藝』はその機関誌で、大正十四年に創刊された。乱歩は探偵小説が大衆文芸として扱われることに違和感を持ちつつも、この会に参加することになった。乱歩がこの雑誌に書いた小説は「灰神楽」「お勢登場」「鏡地獄」の三篇であった。

「鏡地獄」の発想は『科学画報』に掲載された質問だったという。球体の内面を全部鏡にして、その中心に物を置いたら、どんな像が写るでしょうか、というものである。

この「鏡地獄」は、三十何枚という分量であったが、乱歩はこれを一晚で書いたという。「遅筆の私には一日三十枚というレコードは算えるほどしかない中にも、鏡地獄は一番早く書けたように記憶している」。『探偵小説四十年』にも引用のある、昭和四年の「楽屋囁」で乱歩は執筆当時のことを回想している。

執筆の翌朝訪ねてきた水谷準に、乱歩はこれを朗読する。水谷の反応は『サア』と言っただけで、乱歩は落胆する。しかし、『大衆文藝』を編集していた池内祥三が原稿を取りに来たため、ためらいながらも渡してしまう。

このような自作朗読を友人の探偵作家や家族にも何度かおこなっている。探偵作家たちのあいだでもしばしばおこ

なわれていたようである。しかし、「自作を朗読したのは、この場合などが最後で、絶えて久しく、そういう情熱に遠ざかっている」とある。少なくともこの「鏡地獄」までは、そういった朗読を視野に入れた執筆がなされていたということでもあるだろう。

この、戦前に書かれた「鏡地獄」を、乱歩は昭和二十一年の五月に書きなおしたのだった。ここに紹介する原稿は、昭和二十一年の発書簡控に残っているものである。

立教大学に寄託されている乱歩資料のなかに、乱歩の書いた書簡の控えが約三十冊ある。乱歩は複写式の原稿用紙で手紙を書いていたので、書いた書簡もかなり残っているのである。この現存する複写は昭和二十年代を中心にしたもので、この「鏡地獄」は昭和二十一年の書簡冊子にあった。

小川一彦宛五月七日書簡と、井上英三宛五月十五日の間に、「鏡地獄」の原稿がある。

小川一彦というのは映画評論家の双葉十三郎のことである。『探偵小説四十年』（桃源社、昭和三十六年）にはこのように書かれている。

五月九日 小川一彦（双葉十三郎）君はじめて来訪。探小洋書四冊貸してくれる。こちらにも二重にある文庫本四冊呈上する。（註、双葉君が探偵小説通なのに驚いたが、私の師匠というべき、もっと外国探小通の男がいるから、今度連れて来ますという。それが植草甚一君であった。双葉、植草両君は飯島正氏などのグループで、戦前映画雑誌「スタア」に探偵小説を翻訳していたということをはじめて知った）

五月十二日 東宝の植草甚一、双葉両君来訪、英米探小のこといろいろ教わる。「アイルズの「殺意」の面白さを教えられたのも、このときだったと思う」

井上英三については以下の記述がある。

六月十九日 井上英三氏宅（吉祥寺）に赴き、英語本六冊借り来る。（註、井上英三氏は戦前の探偵小説翻訳家。カーの「絞首台の秘密」を早く訳しておられ、随ってカーの本は沢山持っていたので、私はそれを借りに行ったのである。井上氏はその後間もなく病没された）

ちなみにどちらの書簡も、先日のもちからの手紙は検閲のため到着が遅れ、本日拝受しました、という意味の書き出しになっている。昭和二十年の末に疎開先から戻った乱歩は、探偵小説の復興に向けて活発に動いていた。占領下の不自由な状況で、作家や出版関係者と会い、連絡を交わしていた。この「鏡地獄」原稿はそのような戦後の交流の最中に書かれたものである。

原稿の一枚目には「大阪放送局 放送用原稿（新日本芸術連盟幹旋） 五月十日渡し」とある。『探偵小説四十年』を見ると、昭和二十一年の章に、以下のような箇所を見つけることが出来る。

三月二十一日 赤坂山王「山の茶屋」にて新日本芸術聯盟発起人会。探偵作家の出席者は予のほかに大下宇陀児君のみ。ほかは大部分長谷川伸氏一派若手作家なり。大林清、山岡荘八など実際の仕事に当るらし。司会中谷博。

五月三十日 午後二時より赤坂山王、山の茶屋にて新日本芸術聯盟の相談会。発起人は河竹繁俊、伊原宇三

郎、大下宇陀児、江戸川乱歩、中谷博（註、中谷さんは戦前から戦争中にかけて、大衆文学の評論をよく書いた人で、早稲田大学の教授である。この人が恐らく実際の中心だったのではないかと思う。ほかの発起人は、指名されて承諾した程度のものであった。文芸家協会はまだ活動を起さず、中谷氏などが、いちはやくこういう聯盟を構想したのであろう。探偵作家が二人も発起人に加わっているのは、敗戦直後、他の大衆文学がおくれているあいだに、探偵小説だけが、いかに先頭を切っていたかを語るものである」

このような会合に出席する中で、「鏡地獄」の依頼があったのだろう。

基本的に以前の「鏡地獄」と内容は同じである。ただ、冒頭をはじめとして、多くの箇所が削除されている。（大正十五年の春陽堂版『湖畔亭事件』から引用。ルビ省略。比較しやすいよう旧字を新字に直した。）

「珍しい話をとおつしやるのですか、それではこんな話はどうでせう。

ある時、五六人の者が、怖い話や、珍奇な話を、次々と語り合つてゐた時、友達のKが、最後にこんな風に始めた。本当にあつたことか、Kの作り話なのか、其後尋ねて見たこともないので、私には分らぬけれど、種々不思議な物語を聞かされたあとだつたのと、丁度その日の天候が、春も終りに近い頃の、いやにドンヨリと曇つた日で、空気が、まるで深い海の底の様に、重々しく淀んで、話すのも、聞くのも、何となく狂気めいた気分になつてゐたからでもあつたのか、その話は、異様に私の心をうつたのである。話といふのは……

このあと一行空いて、「私に一人の不幸な友達があるのです。」と続く。この冒頭部分の他にも、この原稿と発表されたものを照らし合わせてみると、いくつか削られている箇所を発見することが出来る。二段落目と三段落目のあいだには、少年時代の、光を反射させると文字が映る鏡の説明がすべて削除されている。

こういったものは、内容的に問題があるようなものではないから、分量の面から削除したと考えられる。おそらく短縮版の作成を依頼されたのだろうが、乱歩は単に省略を

して短いものを作成したのではない。いくつかの部分で、表現が少しずつ変更されていることにも気づく。以下、小説の結末部分を引用しておく。

それは、到底人間の想像を許さぬ所です。球体の鏡の中心には入つた人が、嘗つて一人だつてこの世にあつたでせうか。その球壁に、どの様な影が映るものか、物理学者とて、これを算出することは不可能でありませう。それは、ひよつとしたら、我々には、夢想することも許されぬ、恐怖と戦慄の人外境ではなかつたのでせうか。世にも恐るべき悪魔の世界ではなかつたのでせうか。そこには、彼の姿が彼としては映らないで、もつと別のもの、それがどんな形相を示したかは、想像の外ですけれど、鬼も角、人間を発狂させないでは置かぬ程の、あるものが、彼の眼界、彼の宇宙を覆ひつくして、映し出されたものではありませんまいか。

たゞ、我々からうじて出来ることは、球体の一部である所の、凹面鏡の恐怖を、球体にまで延長して見る外にはありません。あなた方は、定めし凹面鏡の恐怖なれば、御存じであります。あの自分自身を顕微鏡にかけて、覗いて見る様な、悪夢の世界、球体の鏡

はその凹面鏡が果てしもなく連つて、我々の全身を包むのと同じ訳なのです。それ丈けでも単なる凹面鏡の恐怖の、幾層倍、幾十層倍に当りますが、その様に想像したばかりで、我々はもう身の毛がよ立つてはありませんかそれは謂ゆる凹面鏡によつて囲まれた小宇宙なのです。我々の此の世界ではないのです。もつと別の恐らく狂人の国に相違ないのです。

私の不幸な友達は、さうして、彼のレンズ狂、鏡気違ひの、最端を極めやうとして、極めてはならぬ所を極めやうとして、神の怒りにふれたのか、悪魔の誘ひに敗れたのか、遂に、恐らく彼自身を亡ぼさねばならなかつたのでありませう。

彼はその後、狂つたまゝこの世を去つて了ひましたので、事の真相を確むべきですがともありませんが、でも、少くとも私丈けは、彼は鏡の玉の内部を冒したばかりに、遂にその身を亡ぼしたのだといふ想像を、今日に至るまでも捨て兼ねてゐるのでございます。

(立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター学術調査員)

大坂放送
放送用を
おるまの略
（略）
本日十日

2

鏡地獄	江戸川乱歩
ある不幸な友達の身の上話です。名前は假りに彼と申し	
ておきませうか。彼には一つの奇妙な病気があつたので	
す。ひよつとしたら遺傳かも知れません。といふのは、彼	
の曾祖父さんに当る人が「当時御禁制の」切支丹に帰依し	
てゐる「て」たことがあつて、彼のうちの古いつづらの中に	
は、「古めかしい横文字の書物や、「ア」マリアさまの像や、	
基督磔刑の石版画などが入つてゐるのです。そんなもの	
と一緒に、伊賀越道中双六に出て来るやうな一世紀も前の	
望遠鏡だとか、妙な恰好の磁石だとか、当時ギヤマンとか	
ビイドロとか云つたのでせう、美しいガラスの器物だとか	
が同じつづらにしまひこんであつて、彼は小さな時分から	
よくそれを出して貰つては遊んでゐたものでした。	
考へて見ますと、彼は幼い時分から物の姿の映るもの、	
例へばガラスとかレンズとか鏡とかいふものに不思議な嗜	
好を持つてゐました。それが証據には彼のおもちやと云へ	
ば、幻燈器械だとか遠眼鏡だとか虫眼鏡だとか、そのほか	
将門眼鏡、■ ■ ■ 萬華鏡、目にあてると人物や景色が平べ	
つたくなつたり、細長くなつたりするプリズムのおもちや	

鏡地獄 江戸川乱歩


ある不幸な友達の身の上話です。名前は假りに彼と申し
ておきませうか。彼には一つの奇妙な病気があつたので
す。ひよつとしたら遺傳かも知れません。といふのは、彼
の曾祖父さんに当る人が「当時御禁制の」切支丹に帰依し
てゐる「て」たことがあつて、彼のうちの古いつづらの中に
は、「古めかしい横文字の書物や、「ア」マリアさまの像や、
基督磔刑の石版画などが入つてゐるのです。そんなもの
と一緒に、伊賀越道中双六に出て来るやうな一世紀も前の
望遠鏡だとか、妙な恰好の磁石だとか、当時ギヤマンとか
ビイドロとか云つたのでせう、美しいガラスの器物だとか
が同じつづらにしまひこんであつて、彼は小さな時分から
よくそれを出して貰つては遊んでゐたものでした。

考へて見ますと、彼は幼い時分から物の姿の映るもの、
例へばガラスとかレンズとか鏡とかいふものに不思議な嗜
好を持つてゐました。それが証據には彼のおもちやと云へ
ば、幻燈器械だとか遠眼鏡だとか虫眼鏡だとか、そのほか
将門眼鏡、■ ■ ■ 萬華鏡、目にあてると人物や景色が平べ
つたくなつたり、細長くなつたりするプリズムのおもちや

「」消してある部分
■ぬりつぶしてある文字
□判読できなかった文字
「」挿入部分

その屋の傍に眼鏡、（原稿）
と人々の景色を平べつたくなり細長く
なつたりする。けれどもあんなにかとわ、そ
うなものをあつたのみです。

大學時代はまゝなうはなしてゐたのです
 だ、中世校の上級生に逢んで、物理學を教へる
 やうになりまうと、新舊派の通り物理學は
 レン不や鏡の理論がよろまうね、彼はもう
 九十年中にまうとしあつて、その時分をふ、
 病氣といつてもよいほどのレン不や、鏡を造

ねた愛つて来るひです。四面鏡といふものが
 ありますね。その鏡は板を厚すと、自分の顔
 が巨人のやうに見えて、小さな足次の一つ一
 つかまうで月せ果つる表面の死火山のやうに味
 方、あの荒味の雲に鏡むす。物理の時間には、
 その四面鏡を生徒の間に廻して、次々と輪を
 廻かせたふんころが、 私は一日
 見たとてゾツとしてすぐ板を廻しきつて、私
 はそんな廻つてあると、此何にも睡しきつて
 自分の顔を見せしめて、教室に全休の響きわた

だとか、そんなのばかりだったのです。

少年時代はまださほどでもなかったのですが、中学校の上級生に進んで物理学を教はるやうになりますと、御承知の通り物理学にはレンズや鏡の理論がありますね、彼はもうあれに夢中になつてしまつて、その時分から、病氣といつてもよいほどのレンズ狂、鏡気違ひに變つて来たのです。凹面鏡といふものがありますね。そ「の前」れに顔を寫すと、自分の顔が巨人のやうに見えて、小さな毛穴の一つ一つがまるで月世界の表面の死火山のやうに映る、あの氣味の悪い鏡です。〔学校の〕物理の時間に、その凹面鏡を生徒の間に廻して、次々と〔自分の〕顔を覗かせられたことがあ「るのです」ります。私は一目見るとゾツとしてすぐ次に廻しましたが、彼はそれが廻つて来ると、如何にも嬉しさうに自分の顔を寫して見て、教室■全体に響きわたるやうな聲でホウと感嘆の叫びをあげたのです。

それからといふものは、彼はもう凹面鏡で夢中でした。大小さまざまの凹面鏡を買ひこんで、針金だとかボール紙などで複雑なカラクリ仕掛けを拵へては悦に入つてゐるのです。好きの道だけあつて、彼は人の思ひもつかぬやうな變てこな装置を考案する才能を持つてゐました。中にも不思議■「だつた」のは「魔法の紙幣」といふ仕掛けで「し

大よからざる聲は、おとと響きの時、おとと響きの
 のむす。
 大いさま／＼の凹面鏡を置くこ
 んで、針金おとと響きの凹面鏡を置くこ
 たり、針金おとと響きの凹面鏡を置くこ
 娘さの通ひおとと響きの凹面鏡を置くこ
 やうなまてこそ響きをおとと響きの凹面鏡を置くこ
 ぬま／＼。中／＼不思議の凹面鏡の凹面鏡を置くこ
 いふおとと響きの凹面鏡の凹面鏡を置くこ
 南ま／＼おとと響きの凹面鏡の凹面鏡を置くこ
 か／＼おとと響きの凹面鏡の凹面鏡を置くこ
 の／＼おとと響きの凹面鏡の凹面鏡を置くこ
 さ／＼おとと響きの凹面鏡の凹面鏡を置くこ
 へ／＼おとと響きの凹面鏡の凹面鏡を置くこ
 張／＼おとと響きの凹面鏡の凹面鏡を置くこ
 お／＼おとと響きの凹面鏡の凹面鏡を置くこ
 彼／＼おとと響きの凹面鏡の凹面鏡を置くこ
 イヤ／＼おとと響きの凹面鏡の凹面鏡を置くこ

た」す。それは二尺四方ほどの四角なボール箱で、前に建
 物の入口のやうな穴があいてゐて、その中」こに十円札
 が五六枚、扇のやうに開いて立て、あるのです。彼が「そ
 のおさつを取つてごらん」といふので、私は穴の中へ手
 入れて取らうとしましたが、何と不思議なことには、ちや
 んとそこに見えてゐる紙幣が少しも手にさはらないので
 す。姿はあれど手には取れない幻なのです。

「あつけにとられてゐる私に、」彼が説明したところによ
 りますと、それはイギリスでしたかの学者が考案した「一
 種の手」〔もので、〕仕掛けは、本物の紙幣は箱の底に並べ、
 その上に斜めに凹鏡を装置し、電燈を箱の中に引き込んで
 光線が紙幣にだけ当るやうにすると、凹面鏡の焦点からど
 れだけの距離にある物体はどういふ角度でどの辺に像を結
 ぶといふ理論によつて、うまく箱の穴のところへ紙幣が現
 はれるのださうです。

かうして彼のレンズや鏡に対する異常な嗜好はだん／＼
 嵩じて行くばかりでしたが、やがて中学を卒業しますと、
 上の学校に入らうともしないで、もうひとかど大人になつ
 た気で、庭の空地にちよつとした実験室を新築して、一日
 中その中に入りびたつてゐるやうになりました。サア、さ
 うなると彼の病氣は俄かに驚くべき加速度で昂進しはじめ

仕掛中、本物の紙幣は箱の底に並べ、その
 上は斜めに眼鏡を置き、電燈の箱の中へ引き
 込んで、支障を紙幣に与えずに、と、
 四角鏡の底をどういふやうの距離に、物作
 りどういふ角を、どのどの像と結び、どの理
 論より、うすく、箱の底のところへ紙幣が
 現れる、のふきと、

のうし、彼のレンガの鏡に、對する、電燈の箱
 縁は、かん／＼、並び、行く、ゆかり、むし、た、め
 か、て、半、分、を、半、分、と、上、の、半、分、に、入、る、う、

ともし、うし、で、も、う、た、ど、か、ど、大、人、に、な、る、つ、て、衆
 目、を、た、だ、に、な、る、う、と、一、人、を、監、査、室、を、訪、見、し
 て、一、日、中、の、中、に、入、り、か、た、つ、て、な、る、う、と、
 ろ、う、ま、し、た、サ、ア、ま、う、な、と、彼、の、病、氣、を、保
 かん、な、つ、て、た、だ、に、な、る、う、と、し、な、る、う、と、
 天、空、を、た、だ、に、な、る、う、と、卒、業、を、た、だ、に、な、る、う、と、
 も、の、世、界、は、た、だ、に、監、査、室、の、中、に、限、ら、れ、て、
 し、な、る、う、と、お、う、と、な、る、う、と、い、ふ、な、る、う、と、
 同、業、を、た、だ、に、監、査、室、を、た、だ、に、な、る、う、と、
 ら、な、る、う、と、し、な、る、う、と、

私は訪問するに、彼の病氣が、かん／＼、
 つのつて、行く、う、と、今、は、監、査、室、に、近、い、状、態、
 に、な、つ、て、な、る、う、と、見、て、な、る、う、と、監、査、室、を、
 得、な、い、の、む、し、た、その、上、更、に、い、く、な、る、う、と、
 こと、は、ある、年、の、流行、感冒、の、ため、に、不幸、に
 も、彼の、病、氣、が、た、だ、に、な、る、う、と、し、な、る、う、と、
 む、す、な、る、う、と、彼は、今、は、誰、の、病、氣、の、ため、に、な、る、う、と、
 更、に、な、る、う、と、愛、を、つ、て、い、て、思、ふ、が、な、る、う、と、
 最、後、の、病、氣、が、な、る、う、と、い、て、な、る、う、と、

たのです。元来友達の少い方でしたが、卒業以来といふも
 のは彼の世界は狭い実験室の中に限られしまって、どこへ
 遊びに出るといふではなく、同窓生で彼の部屋を訪れるも
 のは私たゞ一人になつてしまつたのでした。

私は訪問するたびに、彼の病氣がだん／＼つとつて行つ
 て今では殆んど狂氣に近い状態になつてゐるのを見て、ひ
 そかに戦慄を禁じ得ないのです。その上更らにいけなかつ
 ったことは、ある年の流行感冒のために、不幸にも彼の両親
 が揃つてなくなつてしまつたものですから、彼は今は誰に
 気兼ねの必要もなく、莫大な財産まで受けついで、思ふが

まゝに振舞ふことがでるやうになつたのです。

最後の破局が来るまでに、彼がどんなことやつてゐたか。ごくそのあらましをお話ししておきますと、先づ一番目立つたのは、実験室の屋上に小型の天文台を築いたことです。可なり立派な天体望遠鏡を備へつけ、例の丸い屋根まで本物の天文台のやうに造らせて、暫くは天体観測に夢中になつてゐました。その合間には部屋から部屋へ望遠鏡の装置を作つて、**■**傭人達の私室を、少しも相手に悟られないで覗いたり、虫眼鏡や検微鏡で微生物の生活を観察したり、レンズと鏡に関する限り、ありとあらゆる事をやりつくしたといつてもよいのでした。

ある時はこんなこともありました。その日私が彼の実験室を訪ねて、心易だてに案内も乞はず扉をひらきますと、「窓という窓になぜかすつかり暗幕を張つて」窓に厚いカーテンが引いてあつて、部屋の中は夕暮れのやうに薄暗くなつてゐましたが、その正面の壁「二杯」に、何だか非常に大きなものがモヤ／＼と動いてゐるのです。気のせるがと思つて目をこすつて見直しましたが、やつぱり何だか薄気味の悪いものが動いてゐる。私は戸口に佇んだま、息をのんでその怪物を見つめてゐました。すると見てゐる内に、霧みたいなものがだん／＼ハツキリして来て、針を植

やつかり行かぬ博覧強識のまゝいものか知れてな
 る。私は戸口には佇んばかり息をのんびりその瞳
 鏡をうつめしゐる。すうと見こみぬに
 雲やないものかかんくハツキリして素て
 針を極までみよる黒い雲、その下にギョロリ
 と光つてゐる盥はどの大きな眼、瞳の茶色
 かやつち虹彩のうず眼の平の血をまきでも、すわ
 うどソフト・フォーカスの寫眞のやうに、ほ
 んやりとゐるやうで、そのくせ妙に鮮
 明な感じ、
 その大きな眼がハツキリとまき
 してゐるのです。それこそ襟裾のやうな黒毛
 の光る洞穴やたいさ集の孔、厚い蒲團を二枚
 重ねたほどの厚み、その間からやうく
 と白い瓦のやうな面が覗いてゐる。つまり部
 屋一杯の人の顔、それこそ知れてゐるや
 うな、着る映画やうなやうなやうな、眼
 鏡のやうなやうなやうなやうな、色も決し
 て着るやうなやうなやうな、人間の肌の色、その
 色、不気味さやうなやうなやうな、
 は自分があつてもうかつたのやうな、まゝいかに

多たやうな黒い叢、その下にギョロリと光つてゐる盥ほどの
 の大きな眼、瞳の茶色がかつた虹彩から「白」眼の中の
 血管までも、ちやうどソフト・フォーカスの寫眞のやう
 に、ぼんやりしてゐるやうであつて、そのくせ妙に鮮明な感
 じで、「そこに動いてゐるのです」その大きな眼がパチツパ
 チツとまばたきしてゐるのです。それから棕櫚のやうな鼻
 毛の光る洞穴みたいな鼻の孔、厚い蒲團を二枚重ねたほど
 の眞赤な唇、その間からギラ／＼と白い瓦のやうな歯が覗
 いてゐる。つまり部屋一杯の人の顔、それが生きて動いて
 ゐるのです。着色映画やなんかではありません。映画のや
 うにチラ／＼しないのです。色も決して着色したものでは
 ない。人間の肌の色そのまゝ、「で毛穴までハツキリ見えて
 ゐる」です。不気味さよりも恐ろしさよりも、私は自分が
 氣でもちがつたのではあるまいかと、思はず妙な叫び聲を
 立てました。

すると「驚いたかい。僕だよ。僕だよ」と別の方角から
 彼の聲がして、ハツと私を飛上らせたことには、その聲の
 通りに壁の怪物「が」の唇と舌が動いて、盥のやうな眼が
 ニヤリと笑つたのです。

「ハハハ、、どうだいこの趣向は」突然部屋が明るく
 なつて、一方の隅の暗室から彼の姿が現れました。それと

る部分が、鏡と鏡が又触れ合ふために、無限の鏡となつて映るものに相違ありません。彼ら上下左右に彼と同じ次の数階りもない人間がうじや／＼と無限の機方まで重なり合つてゐるのです。さういふやうなやつとすゝむなかりません。私は不便の源、八種の災難、その見せ物で、聖なるもの作約にはあらず。また鏡の部屋に純粋にすることゝありませぬ。その初級なものでは、私はほん人に感ずるべく感じこれとてせす。私はこの不気味さよく覺えてゐるものであらず。私は鏡の部屋へ入つて見るといかに勤めと云ふ所にも、固く拒み入らうとほしまへてゐる。

その内、元々多岐にわたる彼の健康

大。而も、肉集の意へるのと反比例に、彼の

異様を察する。つのはかりをした。彼は

莫大焉（五ノ）用を授けし（五ノ） 標々の形を以て饒を集
 めばじりまゝに。平面、凸面、凹面、凹型、

聖と、よくいふ人
 及び愛つる形
 加集

アト = 18
19 = 2
20 = 3
21 = 4
22 = 5
23 = 6
24 = 7
25 = 8
26 = 9
27 = 10
28 = 11
29 = 12
30 = 13
31 = 14
32 = 15
33 = 16
34 = 17
35 = 18
36 = 19
37 = 20
38 = 21
39 = 22
40 = 23
41 = 24
42 = 25
43 = 26
44 = 27
45 = 28
46 = 29
47 = 30
48 = 31
49 = 32
50 = 33
51 = 34
52 = 35
53 = 36
54 = 37
55 = 38
56 = 39
57 = 40
58 = 41
59 = 42
60 = 43
61 = 44
62 = 45
63 = 46
64 = 47
65 = 48
66 = 49
67 = 50
68 = 51
69 = 52
70 = 53
71 = 54
72 = 55
73 = 56
74 = 57
75 = 58
76 = 59
77 = 60
78 = 61
79 = 62
80 = 63
81 = 64
82 = 65
83 = 66
84 = 67
85 = 68
86 = 69
87 = 70
88 = 71
89 = 72
90 = 73
91 = 74
92 = 75
93 = 76
94 = 77
95 = 78
96 = 79
97 = 80
98 = 81
99 = 82
100 = 83
101 = 84
102 = 85
103 = 86
104 = 87
105 = 88
106 = 89
107 = 90
108 = 91
109 = 92
110 = 93
111 = 94
112 = 95
113 = 96
114 = 97
115 = 98
116 = 99
117 = 100
118 = 101
119 = 102
120 = 103
121 = 104
122 = 105
123 = 106
124 = 107
125 = 108
126 = 109
127 = 110
128 = 111
129 = 112
130 = 113
131 = 114
132 = 115
133 = 116
134 = 117
135 = 118
136 = 119
137 = 120
138 = 121
139 = 122
140 = 123
141 = 124
142 = 125
143 = 126
144 = 127
145 = 128
146 = 129
147 = 130
148 = 131
149 = 132
150 = 133
151 = 134
152 = 135
153 = 136
154 = 137
155 = 138
156 = 139
157 = 140
158 = 141
159 = 142
160 = 143
161 = 144
162 = 145
163 = 146
164 = 147
165 = 148
166 = 149
167 = 150
168 = 151
169 = 152
170 = 153
171 = 154
172 = 155
173 = 156
174 = 157
175 = 158
176 = 159
177 = 160
178 = 161
179 = 162
180 = 163
181 = 164
182 = 165
183 = 166
184 = 167
185 = 168
186 = 169
187 = 170
188 = 171
189 = 172
190 = 173
191 = 174
192 = 175
193 = 176
194 = 177
195 = 178
196 = 179
197 = 180
198 = 181
199 = 182
200 = 183
201 = 184
202 = 185
203 = 186
204 = 187
205 = 188
206 = 189
207 = 190
208 = 191
209 = 192
210 = 193
211 = 194
212 = 195
213 = 196
214 = 197
215 = 198
216 = 199
217 = 200
218 = 201
219 = 202
220 = 203
221 = 204
222 = 205
223 = 206
224 = 207
225 = 208
226 = 209
227 = 210
228 = 211
229 = 212
230 = 213
231 = 214
232 = 215
233 = 216
234 = 217
235 = 218
236 = 219
237 = 220
238 = 221
239 = 222
240 = 223
241 = 224
242 = 225
243 = 226
244 = 227
245 = 228
246 = 229
247 = 230
248 = 231
249 = 232
250 = 233
251 = 234
252 = 235
253 = 236
254 = 237
255 = 238
256 = 239
257 = 240
258 = 241
259 = 242
260 = 243
261 = 244
262 = 245
263 = 246
264 = 247
265 = 248
266 = 249
267 = 250
268 = 251
269 = 252
270 = 253
271 = 254
272 = 255
273 = 256
274 = 257
275 = 258
276 = 259
277 = 260
278 = 261
279 = 262
280 = 263
281 = 264
282 = 265
283 = 266
284 = 267
285 = 268
286 = 269
287 = 270
288 = 271
289 = 272
290 = 273
291 = 274
292 = 275
293 = 276
294 = 277
295 = 278
296 = 279
297 = 280
298 = 281
299 = 282
300 = 283
301 = 284
302 = 285
303 = 286
304 = 287
305 = 288
306 = 289
307 = 290
308 = 291
309 = 292
310 = 293
311 = 294
312 = 295
313 = 296
314 = 297
315 = 298
316 = 299
317 = 300
318 = 301
319 = 302
320 = 303
321 = 304
322 = 305
323 = 306
324 = 307
325 = 308
326 = 309
327 = 310
328 = 311
329 = 312
330 = 313
331 = 314
332 = 315
333 = 316
334 = 317
335 = 318
336 = 319
337 = 320
338 = 321
339 = 322
340 = 323
341 = 324
342 = 325
343 = 326
344 = 327
345 = 328
346 = 329
347 = 330
348 = 331
349 = 332
350 = 333
351 = 334
352 = 335
353 = 336
354 = 337
355 = 338
356 = 339
357 = 340
358 = 341
359 = 342
360 = 343
361 = 344
362 = 345
363 = 346
364 = 347
365 = 348
366 = 349
367 = 350
368 = 351
369 = 352
370 = 353
371 = 354
372 = 355
373 = 356
374 = 357
375 = 358
376 = 359
377 = 360
378 = 361
379 = 362
380 = 363
381 = 364
382 = 365
383 = 366
384 = 367
385 = 368
386 = 369
387 = 370
388 = 371
389 = 372
390 = 373
391 = 374
392 = 375
393 = 376
394 = 377
395 = 378
396 = 379
397 = 380
398 = 381
399 = 382
400 = 383
401 = 384
402 = 385
403 = 386
404 = 387
405 = 388
406 = 389
407 = 390
408 = 391
409 = 392
410 = 393
411 = 394
412 = 395
413 = 396
414 = 397
415 = 398
416 = 399
417 = 400
418 = 401
419 = 402
420 = 403
421 = 404
422 = 405
423 = 406
424 = 407
425 = 408
426 = 409
427 = 410
428 = 411
429 = 412
430 = 413
431 = 414
432 = 415
433 = 416
434 = 417
435 = 418
436 = 419
437 = 420
438 = 421
439 = 422
440 = 423
441 = 424
442 = 425
443 = 426
444 = 427
445 = 428
446

の中に鏡の部屋を造りました。「前後」四方の壁は勿論、天井も床もドアまでもすつかり鏡で出来てゐるのです。彼は一本の蠟燭に火をつけて、たつた一人でその鏡の部屋の中に長い間入つてゐるのです。いつたい何の為にそんな真似をするのが誰にも分りません。しかし、彼がその中で見る光景は想像することが出来ます。六方を鏡で張りつめた部屋の眞中に立てば、そこには彼のからだのあらゆる部分が、鏡と鏡が反射し合ふために、無限の像となつて映るものに相違ありません。彼の上下左右に彼と同じ姿の數限りもない人間がウジャ／＼と無限の彼方まで重なり合つてゐるのです。考へただけでもゾツとするではありませんが。私は子供の頃、八幡の數知らずの見世物で、型ばかりの代物ではありましたが鏡の部屋を経験したことがあります。その幼稚なものでさへ私にはどんなに恐ろしく感じられたことであらう。私はその不気味さをよ

く覚えてゐたものですから、彼に鏡の部屋へ入つて見な
いかと勧められた時にも、固く拒んで入らうとはしません
でした。

その内に、元々余りよくなかつた彼の健康が日一日とそこなはれて行くやうに見えました。でも、肉体が衰へるの

つたものです。広い実験室も日々かつぎこまれる変形鏡で埋まつてしまふ程でした。それから、もつと驚いたのは、彼が広い庭の中央にガラス工場を建てはじめたことです。それは彼独特の設計のもので、特殊の製品については日本では類のないほど立派なものでした。技師や職工なども選みに選んで、その為には残りの財産を全部投げ出しても惜しくないといふ意気込みだったのです。

不幸にも彼に■意見を加へてくれるやうな親戚は一軒もありませんでした。召使の中には見に見かねて意見をするものもないでは無かつたのですが、そんなことがあればすぐさまお拂箱で、残つてゐる者共はたゞもう法外に高い給金目当てのさもしい連中ばかりでした。その場合、彼にとつてはたつた一人の友人である私としては、何とか彼をなだめてこの暴挙を止めなければならなかつたのですが、そして幾たびとなくそれは試みたのですが、いつかな狂氣の

と反比例に、彼の異様な病癖は益々つのるばかりでした。彼は莫大な費用を投じて、様々の形をした鏡を集めはじめました。平面、凸面、凹面、波型、筒型と、よくもあんなに変わった形「のもの」が集

彼の別段悪事といふてはよく、彼自身も斯く、
を彼が勝手な便りのでするやう、さう強いこ
と云へず、私は「ただ」もうハラ／＼して彼の氣が
な激治を眺めてゐる外はないのでした。
そんなわけで、私はその頃から可なり足しげく彼の家に
出入りするやうになりました。せめては彼の行動を監視な
りともしてゐようといふ心持だつたのです。従つて彼の実
験室の中で目まぐるしく変化する彼の魔術を見まいとして
も見ないわけには行きませんでした。それは実に驚くべき
怪奇と幻想の世界でありました。彼の病癖が絶頂に達す
ると共に、彼の不思議な天才もまた残るところなく發揮さ
れたのでありませう。走馬燈のやうに移り変わる、悉くこの
世のものならぬ、怪しくも美しい光景、私はその当の怪し
い見聞を、如何に語べきかに苦しむのであります。
外部から買入れた「各種の」鏡と、足らぬ所や、外では
仕入れることの出来ない形のものは、彼自らの工場で製造
した鏡によつて補ひ、彼の恐るべき夢想は次から次へと実
現されて行くのでした。

ある時は部屋全体が凹面鏡、凸面鏡、波型鏡、筒型鏡の
洪水です。その中央で踊り狂ふ彼の姿は、或は巨「人」の
如く、或は一寸法師の如く、或は細長、或は平に、或は曲

見るべき層層な地獄へと實現さば行く
 のむし。
 而る時は部屋全体が四面鏡、凸面鏡、凹面
 鏡、筒面鏡の淡水むす。その中央で踊り狂ふ
 彼の影は、其影の如く或は一寸法師の如く、
 或は細長、或は平舌に、或は曲りくねり、或
 は胸はもうか、或は背の下に背がつなり、
 或は一ツの腹に腹が四つ瞬き、或は唇が上下
 し無言で伸び、或は結み、或の影がまた互に
 なり、交錯して、紛れ難く、地獄の饗宴を
 みる思ふ。

而る時は部屋全体が巨人の万華鏡むす。巨
 大なカラクリは数千里と廻り、廻る數十
 尺の鏡の三角の筒の中には、花屋の店を空にし
 て集めて来た千紫万紅が、阿片の夢のや
 うに、花辨の一枚「の大きさ」が疊一疊ほどの大き
 さで、何千何万となく五色の虹となり極地のオーロ
 ラとなつて、見る者の世界を覆ひつくす。その中で、「大入道
 の彼が月の表面のやうな巨大な毛穴」彼の姿は世界一ぱい
 の巨人となつて舞ひ狂ふのです。

そのほか種々雑多の怪しくも美しき魔術の数々。それを
 見た刹那人間は氣絶し、盲目となるであらう魔界の見世
 物。私にどうそれをお傳へする力がありません。

そして、そんな狂乱状態がつづいたあとで、遂に悲しむ
 べき破滅が訪れたのです。私の最も親しい友達であつた彼
 は「到頭」たうとう本ものの氣違ひになつてしまつたので
 す。これまでとても彼の所業は決して正氣の沙汰とは思は
 れませんでした。しかし、そんな嬌態を演じながらも、彼
 は一日の多くの時間を常人の如くすごしました。読書もす

「是の如く種々難多の能くも美しき魔術の
數々。それと見れば胡人同く絶し、言語と
取るであらう魔界の見せ物。私にどうそれと
大傳へする力ありませう。」

一、三人は、三人を在船状態かつついなあとて
 遂に悲しむべき破滅が訪ふたのである。その最
 も親しい友達であつた彼は、^{たう}破滅とう、本日の
 氣遣ひになつてしまつたのである。これまでも
 ても彼の所業は決して正義の政治とは思はれ
 ませんでした。しかし、三人を在船状態に置いた

加らうも、彼は一日の多くの時間を病人の如く
 すびしましん。彼等のもすれば、疲ま意へんが
 多ふを郵便して、かうスエ博の監督にも從か
 ぬと念へば、皆をわう。彼の不可思議な雄辯
 と言ふものに、何のまじはりもないのむしん。
 それが、突然、ある日、無期に、終末を、と、
 とううーと夢想することゝ出来ませう。恐ろ
 く、さうな彼の身命に、果てつてゐるまゝ、愛の利重
 か、さうして、それ、公衆の、望に、應入りし、す
 べ、彼の、一、律の、あり、で、も、あつた、の、で、せう。

ある執私に彼うところかうの使ひのし
は慌しく叩き起さんとのひす。

大妻はす。旦那様は大妻さんです。すくは
あまひ下さいまじりせうり

大夏つゝ
とろし
つゝ

「まゐ
か
私
共
も
あ
し
と
り
ま
す
ん。
何
と
い
ふ

けある大きな玉が、おじくころ加つてゐて、
 の中やうに人の大い薙の同えものゐず。をし

て、魚郎さまの両脇はゆきを踏もも見事ト
ふいのちす。何むか非常な驚ろしいことか起

れば瘦せ衰へたからだを駆使してガラス工場の監督にも従ひ、私と会へば昔ながらの彼の不可思議な唯美論を語るのに何のさしさはりもないのでした。それが突然あんな無残な結末をとげやうなどどうして豫想することが出来ませう。恐らくこれは彼の身内に巣くつてゐた悪魔の所業か、さうでなければ魔界の美に深入りしすぎた彼への、神の怒りでもあつたのでせうか。

ある朝 私は彼のところからの使ひのものに慌しく叩き起されたのです。

「大変です。旦那様が大変なんです。すぐにお出で下さい」

29
30

とう知作といふのは、御覽の玉來りの玉さ
 もう一冊大さくしなやうなもので、外部は
 一面に白布が張りつめられ、玉糸の古い宝輝
 室の半を、生かすもののやうに存在したところ
 が、通つてゐるのみです。(おもひ違ひはあつたこ
 とは、今王の衣部のうちで、勅分と
 衣部とを豊穠な笑ひ聲が絶えず出
 るといふもののみです。

28
29

つてあるやうに思はれます。ところが、不審に
おいかけて頂きますと、
使の者の名をうかがう様子は、私まで青おちて
しまひました。何か何かえいといひ相がかり
ませんけれど、私は頭もものゝ取りあへず不従
の如く、駆けつてまいりました。場所はやつぱり実路
堂です。奥にこのやうに入ると、そこには
は数人の召使達が、あつぱんとおれさやうに
まですくんで、一つの縁を物陰で見つめてゐ

「ませんでせうか」

「大變つて、どうしたのだ。」

「それが私共にも少しも分りません。何だか妙な大きな玉がゴロゴロころがつてゐて、その中から人間の笑ひ聲が聞えるのです。そして、旦那さまのお姿はどこを探しても見当たらないのです。何だか非常に恐ろしいことが起つてゐるやうに思はれます。どうか、大急ぎでいらしつて頂けませんか」

使の者のただならぬ様子に私まで青ざめてしまひました。何が何だか少しも仔細が分りませんけれど、私は取るものも取りあへず彼の邸へ駆けつけました。場所はやつぱり実験室です。飛びこむやうに中へ入ると、そこには数人の召使達が、あつけにとられたやうに立ちすくんで、一つの妙な物体を見つめてゐるのです。

その物体といふのは、「昔の」曲藝の玉乗りの玉をもう一層大きくしたやうなもので、外部には一面に白布が貼りつめられ、それが広い実験室の中を、生あるもののやうに右に左にころがり廻つてゐるのです。しかも薄気味悪いことには、多分その「玉の」内部からでせう、「動物とも人間ともつかぬ」異様な笑ひ聲が絶間なく幽かに響いてゐるのです。

32
34

園には口をきいて、二三分彼の名を呼んで見まし
たけれども、相手は人面やうな、まゝ顔と此人
間外のものなうか、一向手あはへないの
みす。

と云うかさういへる(重)く眺めへるゆゑ、王
の表向の一個所に於て四尊を即りくはせ和光
果てりとの王を見しました。そゝがどうやら
玉の半へ入る(重)く、理せぬかたゝゝ言は
すうりひすけんが、取手もなにも雲いので(重)
くこと加害果てせん。なほよく見んと、取手
のとれを膝たたく金幣の穴(金幣)に珠をうてはみ
ますんわ。

これだまふつとして、人間の中へ入つた
あとで、どうも少し腹中が板や落さて、外は
うも中から黒い加同のやわやうなうたのひ羽
ないひせう。
~~あつた~~とすると、甲の人物は一箇中
玉の中にとりこめられて苦しむものなり
観るまでも。

此は其の^二田^一に取手か落さるまいかと、あ
 りを授けますと、京の定部屋の際に取手か

33
35

しい丸い金具が落ちてゐて、それと玉の彫の
 金飾の台座に嵌つて見ると、す清なきつ
 かり念ふのです。しかし園つゝ云ふには板の
 折れこまづゝあて、處を望みさし二人の見
 ても、赤く染しむかゝるいのです。

それーでもさ、いいのよ。平にとさ、お
ふふ、人知れず、肺を呼吸し、まじり、たふ
が、く、あつ、あつ、こゝろ、こゝろ。

若しや？

私等も、**四**こゝにまかりて、田には不耨くま

ところがさうして暫く「玉を」眺めてゐる内に、その表面の一個所に妙な四角な切りくはせが出来てゐるのを発見しました。それがどうやら玉の中へ入る扉らしく、押せばガタ／＼音はするのですけれど、取手もなにも無いので開くことが出来ません。なほよく見ると、取手のとれた跡らしく金物の穴が残るではありませんか。

これはひよつとしたら、人間が中へ入つたあとで、どうかして取手が抜け落ちて、外からも中からも扉が開かぬやうになつたので「はあるまいか」はないでせうか。とする

と、中の人物は一晚中玉の中にとちこめられて苦しんでゐ

36
37

はしとやうな髪の色 魚蒸うゝあまかゝ置物
に空うな眼 一こ、口をたゞしなくおかし
にやう／＼笑つゝある少年、思はず眼を
細かになくするほどした。

云ふ男でもう、彼は豪傑といふそのおす。
し、何か彼を豪傑させぬのてありませう。
まの半ほどとておめをみなくぬで氣いな小笠
はありません。それには何かおかししいおか加
ふものおす。

のわ、いふ一匹船がその中へ入つてゐるやう
 誰にも分りません。郵便船はさういふおあ
 うといふことさへ、つい今更^{やま}まで知るやう
 なのさ。

37
37

微ほかすス。破れに傳つてゐるの、
お血を流し、わがの命めと云々
り、まはさうかう／＼あつたらし
屋の中をゆく、赤い廻つてあちこち、
何處にゆくと、ある書物（コト）によつて男
女子に、お金持と云ひしせん。

やつぱり想像してみた通りだったのです。

それにしても人間の相好が僅か一夜の間にあんなにも変わるものでせうか。昨日までは衰へてこそゐましたけれど、どちらかと云へば神経質にひきしまつた顔で、ちよつと見る怖いほどでしたのが、今はまるで癡呆のやうに顔面の凡ての筋がたるんでしまひ、引かきまはしたやうな髪の色、血走つてゐながら異様に空ろな眼、そして、口をだらしなくひらいてグラ／＼笑つてゐる姿は、■思はず眼を■蔽ひたくなるほどでした。

云ふまでもなく彼は発狂してゐたのです。しかし、何
彼を発狂させたのでありませう。〔ただ〕玉の中にとちこめ
られたくらゐで気が狂ふ筈はありません。これには何か恐
ろしいわけがあるのです。

あの大きなガラス玉は一体全体何の道具なのか、どうして彼がその中へ入つてゐたのか。誰にも分りません。召使達はさういふ玉があるといふことさへ、つい今朝まで知らなかつたのです。

彼はガラスの破片で傷ついたのか、眼の下から血を流して、わけの分らぬことを呟いたり、意味もなくゲラ／＼笑ったりしながら「ら」、部屋の中をウロ／＼歩き廻つておました。私が何を話しかけても、まるで聾になつてしまつたやうだ。

この異様な光景の中へヒヨツコリガラス工場の技師が生動してあふした。私はその技師と云へて矢つと■彼の壁に面をあらわし、彼は面くらつてへドモドしなから、それに■答へましたが、その話をつづめて云へば、かういふことになるのです。

技師は十分以前から、直径四尺、■厚み三分ほどの中空のガラス玉を造ることを命じられ、秘密の内に作業を急いで、それが昨夜おそくやつと出来上つたのでした。技師達は無論その用途を知るべくもありませんが、玉の外側に水銀を塗つて、そのまはりには布を張り、内側を一面の鏡にすること、内部には数ヶ所に強い光の小電燈を装置し、玉の一個所に人間の出入り出来るほどの扉を設けること、扉も無論「湾曲した」ガラスで、内側は他の部分と同じ鏡にすること、というやうな不思議な命令に従つて、その通りのものを造つたのです。

出来上ると、夜半にそれを実験室に運び、小電燈のコードには室内燈の線を連結して、それを主人に引渡したまゝ、帰宅したといふのです。それ以上の事は技師にもまるで分らないのです。

私は技師を返し、狂人は召使達に看護を頼んでおいて、

その鏡壁は一体どんな影が映るものか、
 物理学者でもそれを算出することはないわ
 いわせう。それは甚しおしなう我々には想像
 するもさへ許さんお恐怖と戦慄の人外境で
 はあわづなむせうか。世にも恐るべき魔物の
 世界ではあわづなむせうか。
 そこには、彼の姿が彼とては映らないで
 全く別の生きものの、それがおんな形相であ
 りては想像することもおそろしうか。何
 かし、同じ姿を二重に映し出さるやうな
 写るものがあるが、彼の眼裏、彼の宇宙を覆
 つくして、まぎくと写し出さるものにはあ
 りますまいか。
 私はそこを落してあうかす私の想像の一
 幕八重の道進んて、その上にしめあみこ
 ん、非常なセク／＼しめが、自分の顔を見
 てるまゝ。そこには私の最も好きなものか
 十倍に拡大する私の顔、床の下から私を
 見上げるまゝ。それは湾曲した球体の一
 部で、つまり凹面鏡と同じでうなるか

そこまで考へた時、私は突然心臓が凍りつくやうな恐怖
 を感じました。

彼はガラス玉の中に入つて、ギラ／＼した小電燈の光で
 彼自身の影像を一目見るなり発狂したのかも知れません。
 恐らくさうに違いありません。しかし、「それでは」では、
 何ものがそれほどまでも彼を惑乱せしめたのでせうか。

それは到底人間の想像を許さぬところです。球体の鏡、
 ア、球体の鏡など、いふもの■に誰が考へ及んだでせう。
 しかもその中に我れとわが身をとどこめて、そこに写る影
 を眺めようとした人間が、嘗つて一人だつてこの世にあつ
 たでせうか。

その球壁には一体どんな影が映るものか、物理学者でも
 それを算出することはむづかしいでせう。それは若し
 たら我々には夢想することさへ許されぬ恐怖と戦慄の人外
 境ではなかつたでせうか。世にも恐るべき魔物の世界では
 なかつたでせうか。

そこには、彼の姿が彼としては映らないで、全くの別の
 生きものの、それがどんな形相を示したかは想像することも
 出来ませんけれど、何かしら人間を発狂させないではおか
 んやうなあるものの姿が、彼の眼界、彼の宇宙を覆ひつく
 して、まぎ／＼と写し出されたのではありますまいか。

の
 乙
 乙
 乙
 乙
 乙
 乙
 乙
 乙

御膳王御後

經
二
九
世
を
ま
つ
し

まひまゝのて、事の受相を確しへきよすが

とてあうまゑに
私は今も佳し〜みま

す 彼は玉の鏡の面影を
うらなふて

無きん 身重う 三十一 五の 心
 三十一 征南 征西

亡はしつしまふ
フセの
ふと

[illegible]

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

[illegible]

一、

○

五、
六、
七、
八、
九、
十、

[illegible]

夫リト
P
E
P
1
ん
と、
へ
あ
丁。
す
り
二、
1
き

類くるる

七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十


物を云ふまいで、
その方へ
ワイと
④き
の市
(

三老つてしまふといふやうな、如く説くもある。

く實にさうなるやうにすから、彼は鏡の部屋へ入つて見ると、いかに都めきれいな時、固く拒んで入らうとほしませんでした。

召使達の噂では、彼は時によると一時間近くもこの鏡の箱の中にとちもるのださうです。彼はそこで一体何を見、何を考へてゐたのでせう。ある時などは鏡の部屋に入つたまゝ、余り長い間物音一つしないので、召使達が心配をしてドアを叩いたといひます。すると、いきなりドアが開いて、蠟燭を手にしたすつぱだかの彼がノコノコと出て来て、一ことも物を云はないで、そのまゝ、プイと母屋の方へ行つてしまつたといふやうな妙な「話もあつた」話もあるのでした。

やがて、元々余りよくなかつた彼の健康が日一日とそこなはれて行くやうに見えました。でも、肉■体が衰へるのとは逆に、彼の異様な病癖はますますつるるばかりで「した。」す。彼は莫大な費用を投じて、様々の形をした鏡を集めはじめました。平面、凸面、凹面、波型、筒型と、よくもあんな変つた形が集ま

つてしまつたといふやうな事、彼もあつた。

やがて、元々余りよくなかつた彼の健康が日一日とそこなはれて行くやうに見えました。でも、肉■体が衰へるのとは逆に、彼の異様な病癖はますますつるるばかりで「した。」す。彼は莫大な費用を投じて、様々の形をした鏡を集めはじめました。平面、凸面、凹面、波型、筒型と、よくもあんな変つた形が集ま

一日とそこな衰へて行くやうに見えまして、
 此も、肉■^病癖が衰へるやうとは違ひ、彼の異様な
 病癖はますますつるるばかりで、彼は莫

大なる費用を投じて、様々の形をした鏡を集め
 はじめました。平面、凸面、凹面、波型、筒型、固く拒んで入らうとほしませんでした。

形と、よくもあんな変つた形が集ま

形と、よくもあんな変つた形が集ま

く覚えてゐたものですから、彼に鏡の部屋へ入つて見ないかと勧められた時も、固く拒んで入らうとはしませんでした。

召使達の噂では、彼は時によると一時間近くもこの鏡の箱の中にとちもるのださうです。彼はそこで一体何を見、何を考へてゐたのでせう。ある時などは鏡の部屋に入つたまゝ、余り長い間物音一つしないので、召使達が心配をしてドアを叩いたといひます。すると、いきなりドアが開いて、蠟燭を手にしたすつぱだかの彼がノコノコと出て来て、一ことも物を云はないで、そのまゝ、プイと母屋の方へ行つてしまつたといふやうな妙な「話もあつた」話もあるのでした。

やがて、元々余りよくなかつた彼の健康が日一日とそこなはれて行くやうに見えました。でも、肉■体が衰へるのとは逆に、彼の異様な病癖はますますつるるばかりで「した。」す。彼は莫大な費用を投じて、様々の形をした鏡を集めはじめました。平面、凸面、凹面、波型、筒型と、よくもあんな変つた形が集ま